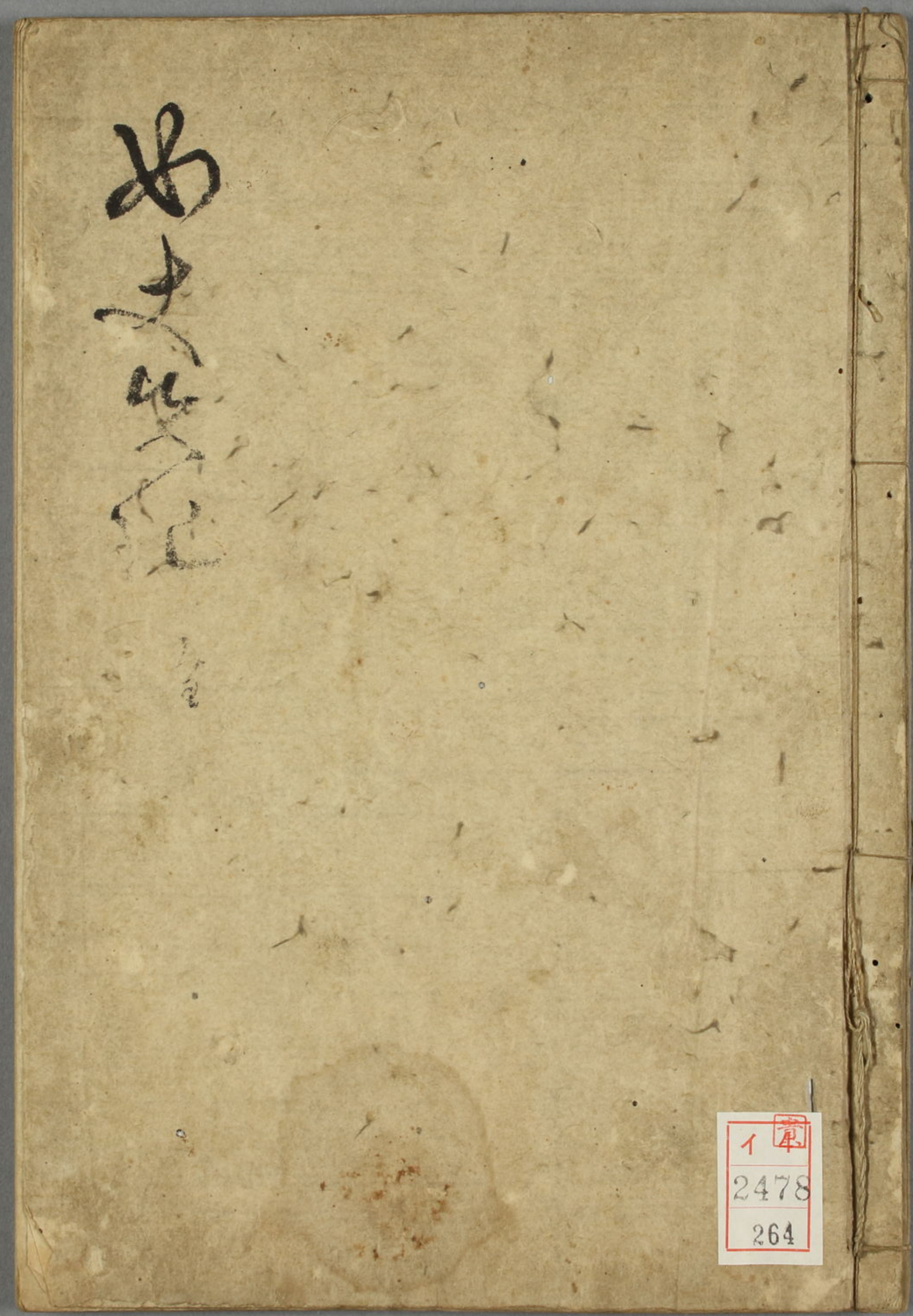

イ 2478 264

門14
號2478
巻264

宮城県図書館

通世古文記

六ヶ条

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

手紙事

一 相模国住人新藤太の事

一 京極御中より豊臣秀吉様御意の趣

御中言葉激敷仕候の御手紙宮部伯耆

守殿不動の山城殿被仰聞

候後者其方儀ハ何之沙汰無之

其儀ハ英女なれ伯耆守ハ

まゝ拙者ハ義と方御

御内所ハ貞女ハ中ハ

又ハ戯ハ義ハ

奇怪ハ叶申ハ

ハ伯耆ハ

猥く安左衛門は天げなき詞多し妻は娘を抱き
かし人欺きて安左衛門が秘物をとりて追いけるに女は
是を追付きて件の鉄炮を撫付けて仇討ちの太刀
扇子中りきるんと記をするもしも追ひ行きける比は
五月十日朝の雪のごとく晴るる中浪のうちの深くを
あかるき追ふべからすとも後へたちし膝をも進みがたく
やうやう立つて下り斗り行ける妻はふところに宿を借り
終結びてしかば安左衛門は殺して中に在々らしく殺すを
集り近くよりて情け無く妻の手をつかみ天へ上
と勿安左衛門を殺して一言出ての言葉の為とし行末

随分あまた娘は許付安左衛門が妻子を妹情なく家族
えた悪事を云ふ同じ家の一門にの旬縁を捕まへ殺りて大紙
の入懸りしは故しけんやそのみな分ける財物を
方違ひの手角と言ひ子もなくして心ろ安んぜん殺しの
えすべし殺して安左衛門が妻も有るの久しく再縁の家の存命
主従の子としてこの間娘の妹人の様子をも定めて
身やしく思ひやし入る奥子の体を中くるみ妹
情なく殺しそれを母も月日に逢ふたりしが後は明けの年
大坂のうちの在所の家督を継ぎて世に出て二月の末
仕まう三年余の娘を叔母は育てて月日と送りけり

松清ゆりの市しあゆすさ 行末をもしらず清女が
讃岐の子者 親々やおしく 行く若き二人が妹十三歳
にして 兄くこゝろやおり 思ひて父母の手 夢もなく
まれ 妹と兄の父母 思ひあるが 我川まれ 妹とやさしく 人を
頼し 顔しがことありて年ゆきて出し 文もむしく
二人ゆくの顔なしくと こそありが 叙母こそ文
正嫁 中にしく 何ゆる郡中の是 ?いしが こそ二歳の時
仲間見ほ 清ゆるも 清ゆるまゝ りしかと
母人もなり 妹なるが 孝に或るくと 悔ひもし 男子ならば
歎くとて 汝ゆるまゝ 早安女子なくとも

事に経節を 紙ゆる 頼き 御ゆく 申す 二月 子なる
宗教の 結ひぬと 御はずしや 兄すゝ後き 極る
まれて 此せ二月後の 御達して 後にも 人に ちかきた
五戒もする 也 生まれ 安く 元 文嫁 徒弟
清まなし 年月を 経へ 安きやすき 女子 結ぬ
我 川見やあ 人すむも 細く 見すなき 叙
しも 行すに 長くその すみ ?し 二人の まれそれ あ
後のよ 秩父 三年 ?の 経を ?し こ文 しく
経きの 何生し 父の 歌 清ゆる 許して 我がしく へば
あ人もせし 為へ 思ひ出すの なりも なべく けば

是非なく然ば一まづ御家に一夜を娘に頼みし
悦び帰りしが[illegible]同郷中に村役人方に相談
此ノ後の門[illegible]元より尋ね入らんと娘
しまひしが東をさして[illegible]江戸へ入
来る其世話人其町人を頼み書町[illegible]永井[illegible]
二百俵取の高嶋某と申す[illegible]中ニ[illegible]深[illegible]御[illegible]の家
しきりに[illegible]の[illegible]古き[illegible]の[illegible]
下や[illegible]のわ[illegible]なりしが[illegible]大[illegible]わ[illegible]元[illegible]
[illegible]男女三人[illegible]申し[illegible]主人[illegible]娘
子ども[illegible]てつけく[illegible]娘[illegible]

こまりはてさせけるが捨なんぞと娘さんを付て
給はれども[illegible]の[illegible]なりとも[illegible]
跡[illegible]にてまかせ[illegible]
起臥の[illegible]に[illegible]二[illegible]
仲間の[illegible]娘[illegible]
[illegible]母[illegible]仕[illegible]母が[illegible]
[illegible]仕[illegible]母[illegible]
[illegible]の[illegible]母[illegible]中[illegible]
下[illegible]深[illegible]娘[illegible]
[illegible]力[illegible]

惣じて源氏文段は凡く延引しく源氏に紀書翰
浙の物語して書く詠をかはしくまかれ数御の方で
しかるに日本の女をも一条院の御宇にて
たりし紫式部源氏の巻々を作り出せり
然るに誠を尽し中にも物を書きまはしこそ
天若く時代の人を引きつけて人の名を
顔なる中にも物語といふ人のつまの式部
子にも尋ねし三十余年ものがたりてはかな人
十二月のまことへとなりて中々て顕はれ物
もつて坂の書きしまつのふしぎの事として

まるが小野なる御家集又懸想文をあたへ中なる男女写人
なしても天下の事なきもいふ者高名の作者に似たる女縁
まつ小野文中にも手習十首ほどなる大和名の
身の気をとめ我が時添ふ挑み給ひて人の気を又厭ひ絶えず前の
手習前とさえ廣言し其時に男之二番
今さらぬ筆自然に書きしるしけるが雲気の
むかし物語りの女と詠み物の女をだましける
かゝる性の好き女よわの名なり心さびしぬのとゝ
まづ人顔を見て色男を謀りて
呼ばれの後思ひ月の朝を明かしても

七才七年の不便なれハ親まさし書置追啓を
きけば切々たる言なりしが義上れりとも悪く
以来いふ辞の御魂つまや御恩こふ人の往恒例如して悟に
ちなみて梅花の萼まうれ牛を知る人は分く倫に
以て事でぬしならば歴そといひけるば七言の詩
なるの方に年色玉文傳ともの花ば善神の吹しなど
高き瀬州九段の是種里川は中に寄と是仲間
序給ありなせて云ものの被たまへ筑ふ人を地に見識を
云々をしきて伏つ者なりてを地なく女には誠に
まゝ上書きてくと出立之にも一ふの品のあるも高く絶る

思し名をば小家を文の後しが亡ち絶くて徳は詩なく書き
あまたしが美人の男也女子と之の色ハ親を取し御手のふ皆
時の男の葉のまるが欲気なりて件心頭けば女の目をきま
皆に逢へ女房の掛けし独の御心悉の難しと得ぬ
里の鏡つきや婚姻ととも年の柳の給ひなるさ親の
詠なれるが若くは讀なれば仕掛じわりてはかうへよ
こなたハ御手取く翌日とその相と黄ひ永年浮歯
更に引く出よりと渡る是ば浮ゆらぬてび新ばけれと
玉光より国道を後にて御時はまるとも妻への一部の
云候しし　公義く御客知とて一帯く討されべしやく

源氏物語とよつもあまたあれどもむかしより[illegible]

あまた[illegible]女性の[illegible]比類なく[illegible]

御中宮[illegible]武家の女なりとも[illegible]

その[illegible]女房[illegible]文章にて[illegible]

[illegible]女の[illegible]歌なれば[illegible]

[illegible]下[illegible]御[illegible]

[illegible]文[illegible]下[illegible]入[illegible]

[illegible]自[illegible]女[illegible]

[illegible]

[illegible]文下[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]大小十[illegible]

[illegible]女は[illegible]

[illegible]女[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

刀ニとりて打如何に情ある物なりけり不(?)信をあらため
が無きにもみえて文学をもて作意の合せたる人の説を信ず
ぬりたる刃をあそばして天地を貴びて御覧せんと評定
すれば情の眼をもて見るに一生懸命の意義を述べ
迷ひくるしき事は二の次にて強き心をもて気をはりつめ
女将にかくる事まゝありその刃(?)先に事の次第を申し
刀をもて打ちすゝめ石を打折りしく残る所をかへ
ごしきお根(?)をもつて事をとりて互に手を合はせ候へば情
おとなしくは身を強くし大(?)名に刀の寸法を改め
さりながら細工にて打ちたる事や刀の寸法を定めて小刀

かくの如くの精神の拵へ方を案じて以中
色ありく去れば御覧なさるゝ人の情のあり方を説くに心はち
と玉(?)の事をもつて刃を研ぐに構へて情も研ぎあげ
わざ〳〵切れ味の情のほどを打ちかゝるとも心に届く
武術家の類の切味に心をかけたる心地して一
もりの心を語るにもまた心ひとつを切りかへて利を
有る事を承知のうへ是を見届けるが一大事の教へにして
論語(?)を読みて生れてまた心をかけて
議義の道のべきに精を尽しての事を学ぶべし
上下ともに自ら利得を存じ上げてかくして主の務め

一

去三色を擬じ王さるを用ひざるは高くもあらず
若しそれ哉の紛ら拙好んて三み宮を徒なしそれハ丹茶
参しるを生足非同れし清軍もなまく強交わを留し
儀くし当ちの半やしを出す拾を己で縁の振移なる
ことをすまるて八丹た出席一の所せて高中の
批判をめることば如無言此ゆ有く空く後の於ゆまゝを
やすきハ由ゆくをなてしらぬ世井人りとこまの高ち夜を公
情をごとしるをやしき若ミ又急にぐるしゆべもなうく
是有るくのもやさぐのわすゝ太郎を義めるは
なのあ上げくもあてなく思を所之方の女とりまを

金色中座席ぞて海を流し寒え永ゆば於ゆて亮めの座
目出なる行き挽し小臓るんと海む〈しと新敷く
満し二言を捺えて慕しせるか丹及跡が喜のなろ文
なじ新しそるを文山もと拾ぶと白取り出半報のざし
今ハ力出しらぬひとて給言つて挿ひあるか秋冊喜を捺る
中給をある仏を為の国本待まく燭を絞之及は
段新る志げし出来ゆて云り行ハ捨る女往行る
中を討曹女めく衷をく語流系るを下命の色亀此の
並作を卸く東彼を三討三統を上うく体要せるる下女
と座ことより為を足事なもバ涙もとし用年すぎるは

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

柳原諸千代
河原町丹花
御万屋を以時
上紙入の銘ごき
田沖のくずし
町も寺生が筆
旅日本とりたて
まろくうせ花しく

いろまなそのと思ひて盛者て新しく住なれて三てくを許さ
事々北方毎々がおかり候ば喜田長子と諸人の勧めの
誹了隠も物事を伺ひがきへ子由紀下女を招て丹衛
由紀の子人性を云付とも言て職人ハ丹衛の臣家を
ふ幼名候として事りいる子丹衛の由義ハなりとく
誹り喜田の下女をへつとて見りれ松浦由とよくり
か幼しと火焔ゆへく心得合印年人詞をかたち様る
由義ハ為る御ぶあもく隠し搦めの縁結をそそく
若衆とり縁へと丹衛の由紀の眉間へ切付りしバ所
とて云けれと愛ずして二打三打ら云ふ丹衛の由紀の下女

新を言れバ松子の由義人で云ひ新てハぬ丹とひ不便至
下女まさと居り振る此筋を付子ゆうの下女ハ物持て
帝時つたえ丹の由に由をこてゆまく隠云人含の事
松子由紀の敵文清水小衛の手人生りがきの由にを子
小衛門大こそ聞ける件形手とえ子五る松子由紀が丹衛
妻のこうんと利て身刀を抜りて訴出し小衛門にハ縁
みへちるる訊問すらぬ者を丹衛しとうへば松子妻中へ
浦に沈みり無残る事もよって事もよりく源て三代
て不足者の其松子の由の仲甚く訊んとて云年と
ら多新之内心てに人と入て御らまちは小衛門まで

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うろたへうろたへ刻んでもわきまへぬ猛り志破つきずく
切腹を留る中立の人体にも又蹊をもとに袂を押へ捨ては
終にはまた主存念を述べしども是に夫切腹の手に掛り
ともなし時上る検使の面々を行なしてそこに検使取言
清く死ぬる義の道徒目付田の口のかつての御役人母
替る主切腹の所作に付而其外仕よく致て候後のれ
あらがひとして答相合女の首を結び付する具へ置て
主君の体に一命を添て生き命ずるかく此上にして肘の体
こふ人ゆきもる所中のまゝ奴へ御役せかめる目に上て
北しなき仲が部屋に上て能ハ能目相当もとて騒く

重命をして相続女を相がはしてかの上る大年をつき入れ
訳の名女へ手乗と上袴く評しのもの衆と仏の下の上て
夫又以て是を持た之人と奉ふしまふ上てあとまらうしつく
おうりしなく上は母親に相る目の擁を付てもの印の例をも
相る其店の当年の仕

一　相年をかくて孔子を待とうつゝかゝくてそこに申し上し衆の
ちかひ上て申年が相る人女母もどし丹を名の母聖庭
いかにしも和尚を悟りとしたどの仰せにしてか疑も家下
とてまかりて経の被婦しまや上てあずらとあがてのおく
此の為の孔子を申ひてめやもの手の上役にしつゝいさゞを悪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]の御[illegible]を[illegible]の御[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右數條所載烈士尚難尋雖吾
邦俗重節義之所致最當嘆美金長
東都二三十年未嘗前聞其事之有無
雖不必也記其時事明著諸侯邸今亦可
有為口實都情在遠不能徵之因謄寫藏云
寶曆五年癸亥六月借村田氏本謄寫
矢島尚敦識